

以上のことから私は、今物語の成立年代を二二五年以後、二二六五年以前と結論づける。

(付記)

本稿は昭和四十三年度提出の卒業論文の要旨である。紙面の都合上、資料をほとんど省略したので詳しくは卒業論文を参照していただきたい。

註一 本朝書籍目録成立は建治三年(三七七)以後、永仁二年(一

二九四)である。

註二 十訓抄と今物語

註三 鎌倉室町時代文学史(昭和十年 国本出版社)

註四 岩波講座 日本文学史 第六卷 中世

註五 日本文学史研究 一三〇号 昭和二十六年八月

註六 第二話、第四話、第五話、第十話、第二十二話、第四十話

註七 久松潜一著 日本文学史 中世

芭蕉の「散文尊重時代」について

——小宮豊隆氏の論を中心として——

帆 足 悠 美 子

はじめに

小宮豊隆氏がその著書、「芭蕉世阿弥、秘伝、勘」^(註一)の中で、「芭蕉の散文尊重時代」という事をいわれたのは、およそ次のような理由からであった。

(1)俳文の制作が、多くのものが貞享四・五年以後、もしくは「おくのほそ道」以後にされている。

(2)「おくのほそ道」が、最初の「野ざらし紀行」を完成した姿であるにもかかわらず、間にはさまれた「鹿島紀行」「笈の小文」

「更科紀行」の一群が脇道にそれている。

(3)「鹿島紀行」「笈の小文」「更科紀行」の一群は、芭蕉の彷徨の跡を示すものである。その彷徨と自得とを我々に告げる徴候の一つとして、「散文尊重時代」をあげることができるのではないか。

小宮氏がいわれる「散文尊重時代」というのは、「芭蕉が是れまでそれほど注目しなかった散文に——散文によって自分自身表現する事に——特に興味を感じだした時代が、丁度この貞享四・五年(元祿元年)の前後に始まったのではないか」ということなのである。

俳聖として名を残した芭蕉に、五つの紀行文があることはよく知られているところである。その中で特に有名なのは「おくのほそ道」であろう。「おくのほそ道」において、芭蕉は俳諧的紀行文といわれるものを完成させている。それが突然にして成ったものではないことはいうまでもない。貞享元年の「野ざらし紀行」から三つの紀行を経て、ほぼ九年の歳月の後にたどりついたところなのである。「野ざらし紀行」から「おくのほそ道」に至るまでに、芭蕉がさまざまの過程を通過してきたであろうことは、容易に推察しうることである。その中に、散文に特に興味を感じ出した時代があったのではなからうかと考えることは、極く自然なことであると思う。

そこで、小宮氏のいわれる「散文尊重時代」について検討してみたいとおもうのである。卒論の目次を掲げると次のとおりである。

序

第一章 俳文について

第二章 紀行文について、(一)、(二)

結び

ここでは紙面の都合上、「第二章、紀行文について、(一)、(二)」のみについて述べてみたい。尚、本文引用は日本古典文学大系、芭蕉文集(岩波書店)を底本とした。

第二章 紀行文について

(一)

次に、小宮氏が第二の理由としておられる紀行文について考えてみよう。芭蕉が散文として、しかもまとまったものとして残したものに、五つの紀行文がある。貞享元年八月故郷に帰る「野ざらし紀

行」、貞享四年八月月見の「鹿島紀行」、同じく十月帰郷の旅「笈の小文」、次いで貞享五年八月、信州更科に月見の「更科紀行」、最後が元禄二年三月下旬に奥羽、北陸の旅「おくのほそ道」である。これらの紀行文は、その執筆年代が「鹿島紀行」を除いてはつきりしない。しかし、だいたい年代は推定することができる。この五つの紀行文を、小宮氏はその執筆年代から、次の三つの群にわけておられる。

(1) 「野ざらし紀行」貞享二年ごろ

(2) 「鹿島紀行」貞享四年八月十五日

「笈の小文」貞享五年八月までに

「更科紀行」貞享五年末までに

(3) 「おくのほそ道」元禄四年―元禄七年

五つの紀行文を三つの群にわけたとき、小宮氏は次のような点を指摘されている。「貞享四年八月に書かれた『鹿島紀行』から、ほぼ一年間に連続してかかれた、『笈の小文』、『更科紀行』の(2)群と、(1)(3)群を比べた時、『野ざらし紀行』で引かれた線が『おくのほそ道』に続いていて、その線上からそれている。そしてそれが、連続して書かれたものという事実が、当時の芭蕉の内部の特殊な状態(つまり、特に散文に興味を感じだした)をあらわしているのではないか。」といわれるのである。

五つの紀行文における散文と韻文の関係を見ると、二つに分けることができる。一つは散文、つまり地の文の中に韻文を散らしていくもの、いまひとつは、散文と韻文をまったく区別して扱ったものである。前者に属するものは、「野ざらし紀行」・「笈の小文」・「おくのほそ道」であり、「鹿島紀行」「更科紀行」は後者に属し

ている。「野ざらし紀行」と「おくのほそ道」を比較してみると、「おくのほそ道」は、「野ざらし紀行」の成長発展した姿であるといふことができる。とすれば、小宮氏のいわれる、「野ざらし紀行」から「おくのほそ道」に引いた線は、正しい線ということになる。

次に、(1)と(3)を結ぶ線からはずれた(2)群について検当することにして。まず、疑問になることは、最初に書かれた「野ざらし紀行」のスタイルが完成された姿となつて、「おくのほそ道」を成しているにもかかわらず、その間にはさまれた三つの紀行文が、なぜ脇道にそれてしまったのか、ということである。確かに、(2)の群を(1)、(3)群と同一線上におくことはできないが、それは、どの程度のはずれ方なのであろうか。三つとも同じようなはずれ方なのであろうか。

最初に五つの紀行文を形式面から分類したとき、二つのグループができることは既に述べた。ひとつは「野ざらし紀行」・「笈の小文」・「おくのほそ道」のグループであり、もう一つは「鹿島紀行」・「更科紀行」のグループである。形式面から考えても、「鹿島紀行」・「更科紀行」は(1)、(3)群からはずれていることが明らかである。

しかし、「笈の小文」をはずすことができるのだろうか。形式的には「野ざらし紀行」と「おくのほそ道」をつなぐ線上に位置を占めているのである。この「笈の小文」を線上からはずした理由を、小宮氏は次のように説明しておられる。「(中略)すべてそのあとにその響に応ずる韻文を伴ふ来がなく、たまたま韻文を伴う箇所があったとしても、多くその韻文はその散文とは無関係で、別な場合の

別な事を表現するか、それだけでなく散文は韻文の、極めて散文的な前書になつてゐるに過ぎない。雙方の相関々係なぞ殆んど無視されて、散文は散文で勝手な事を、韻文で勝手な事を言ひ、まるで背合せに同念してるやうなのである。」以上のような理由をもつて、小宮氏は「笈の小文」を野ざらし紀行」と「おくのほそ道」とを結ぶ線から脇道にずれているといわれるのである。

これで(2)群が(1)・(3)群からはずれた位置にいるという事になつたのであるが、(2)群が一心同体のグループではないことも明らかになつたわけである。(2)のグループをまとめる特徴として小宮氏があげられたものは、

(一)貞享四年からほゞ一年間に連続してかかれてゐる。

(二)「おくのほそ道」の完成された姿は、「野ざらし紀行」を發展させたものであるのに、間にはさまれた三つの紀行文は脇道にずれている。

という点であつた。そこで(2)のグループの特徴を詳細にみていきたいとおもう。順序が逆になるが、(二)の「脇道」の方から少し考えてみることにする。

「鹿島紀行」「笈の小文」「更科紀行」の三つの紀行文のうち、

共通点をもつたものといへば、「鹿島紀行」と「更科紀行」であろう。その共通点の一つはスタイルである。散文で、韻文は韻文で別に取扱つてあり、「野ざらし紀行」や「おくのほそ道」と、区別される。しかし、二つの紀行文の共通点はスタイルだけではないのである。この二つの旅は何のための旅であつたのか。目的は何だつたのか。

「……らくの貞室、須磨のうらの月見にゆきて、『松陰や月は

三五や中納言』といひけむ、狂夫のむかしもなつかしきまゝにこのあきかしまの山の月見ひとおもひたつ事あり。ともなふ人ふたり、浪客の士ひとり、ひとり水雲の僧。(中略)「鹿島紀行」

「さらしなの里、おぼすて山の月見のこと、しきりにすむる秋風の、心に吹きさはぎで、ともに風雲の情をくるはすもの又ひとり、越人といふ。」(更科紀行)

二つの紀行文の冒頭の部分をこのようにしてあげてみると、二つの紀行の共通点がいつそう明らかになるとおもふのである。貞享四年八月に、芭蕉は「鹿島の月」を見るために旅をして、貞享五年(元祿元年)の八月には、「さらしなの里、おぼすて山」の月をみるために旅をしているのである。つまり、この二つの紀行文は、最初からはっきりした目的をもって行われた旅であったのである。この二つの旅で芭蕉は月を見ればよかったのである。月を見ることで旅の目的は果されたのである。「鹿島紀行」と「更科紀行」は以上の理由だけからでも、他の三つの紀行文と異なっていてよいのではなからうか。

ここで、他の三つの紀行文の冒頭を、「野ざらし紀行」「笈の小文」「おくのほそ道」の順に引用してみようと思う。

「千里に旅立て、路糧をつつまず、三更月下何入といひけむ、むかしの人の杖にすがりて、貞享甲子秋八月、江上の破屋をいづる程、風の声そごる寒げなり。」(野ざらし紀行)

「百骸九竅の中に物有、かりに名付て風羅坊といふ。誠にうすもののかぜに破れやすからひ事をいふにやあらむ。かれ狂句を好むこと久し。終に生涯のはかりごととなす。ある時は倦て放擲せし事をおもひ、ある時はすゝんで人にかたむ事をほこり、是非胸中にたてかふて、是が為に身安からず。しばらく身を立む事をねがえども、これが為にさへられ、暫り学で愚を曉事をむもへども、是が為に破られ、つるに無能無芸にして、只此一筋に繋る。」(笈の小文)

「月日は百代の過客にして、行かふ年も又旅人也。舟の上に生涯をうかべ、馬の口をとらえて老をむかふる物は、日々旅にして旅を栖をす。古人も多く旅に死せるあり。予もいづれの年よりか片雲の風にさそはれて、漂泊の思ひやます。海濱にさすらへ、去年の秋、江上の破屋に蜘蛛の古巢をはらひて、や、年も暮、春立てる霞の空に白川の関こえんと、そごる神の物につきて心をくるはせ、道祖神のまねきにあひて取るもの手につかず(後略)」「(おくのほそ道)」

以上、三つの紀行文の冒頭部分と、前記の「鹿島紀行」「更科紀行」の冒頭部分とを比較してみると、同じ紀行といっても、同じ扱いをすることはふさわしくないと考えるのである。

芭蕉の旅がすべて風雅につながるものであることは、五つの紀行、文全部にいえることである。しかし、旅の心がまえというものをみると、「月見」という一つの目的をもった旅と、旅をすることが自的の旅とは、おのずから違つたものがあつてよいと思うのである。「鹿島紀行」「更科紀行」にはない何かを、「野ざらし紀

行」「笈の小文」「おくのほそ道」はもっているとおもおうのである。それは、おそらく芭蕉自身のいきごみのようなものが、ひとつ、ひとつの言葉を通して我々に感じられるからなのだろうと思う。もちろん、「旅の詩人」と呼ばれる芭蕉自身の内部で、「月見の旅」と他の旅とを区別したという証拠はどこにもない。しかし、同じに扱っているという確証もないのである。

生涯に五つの紀行文を残した芭蕉が、最初と最後の紀行文の間に、二つの異なったスタイルの紀行文を書いたことは事実である。しかし、それが二つとも「月見」の旅であったという事を考える時、この二つの紀行文が他の紀行文と同じ形式をとらねばならない必然性は、芭蕉の中になかったのではないだろうか、とおもうのである。小宮氏も、この点は指摘しておられるが、尚、芭蕉の彷徨の跡として、脇道にはずして考えていこうと言われるのである。たしかに形式上の違いはあるが、彷徨とまではいえないと思うのである。

この二つの作品ではあるが、それなりのまとまりをもっている。少なくとも、この二つの紀行文の上に、芭蕉の混乱した姿をみつけることはできないようである。「鹿島紀行」と「更科紀行」は、小宮氏があげておられるところの、「貞享四年からはば一年の間に連続してかかれていて、形式的に異なっている」という理由で、脇道にはずれていることは確かである。しかし、以上のべたような理由で、「野ざらし紀行」から「おくのほそ道」への完成過程を問題にする時、「鹿島紀行」と「更科紀行」は一応別にしておきたいと思うのである。

(一)

芭蕉の散文尊重時代を、貞享四・五年前後に立てる理由については、小宮氏があげられたもののうち、俳文の制作年代については第一章(略)ですでにのべた。残った三つの紀行文の冒頭も、「鹿島紀行」と「更科紀行」については、第二章の(一)に述べたとおりである。

ここにもう一つ、笈の小文の問題がある。「笈の小文」の旅は「鹿島紀行」のあとにあり、「更科紀行」へと続いている。旅当時の芭蕉の状態なり、事情には、前後の紀行と著しく異なった様子はみられない。貞享四・五年は芭蕉にとって、比較的ゆつたりした時代であったと思われる。その時代の中に書かれた、三つの連続した紀行文のうち二つは、短篇ながらもまとまった作品を作っている。

それなのに、あいだにはさまれたはずの「笈の小文」だけが、未完成であったり、散文と韻文との関係がもつとも乱れた作品になったのは何故であろうか。

小宮氏は「笈の小文」の執筆年代について、次のように言っておられる。「是も恐らく旅のすぐあと、少くとも貞享五年(元祿元年)の夏から秋へかけて、芭蕉がまだ山城だの近江だのに滞在し、名古屋から更科へ月見に出かけない前に出来上つてゐたものだろう。名古屋の荷兮が編んだ『曠野』には、元祿二年三月の芭蕉の序が添うてゐるが、それには『笈の小文』の旅の句が、芭蕉の句も杜甫の句も、相当数多く採録されてゐる。それらの句が『笈の小文』と『曠野』とでは多少違った形になってゐるのは、編者の粗漏もありさうであるが、然しより多く笈の小文』以後の推敲を思わせる。」

しかし、「笈の小文」の執筆年代については、他にも説がある。井本農一氏は、「笈の小文」の執筆年代を元祿三・四年頃、すなは

ち「おくのほそ道」の旅から帰ってきてから書かれたものとされている。「笈の小文」には「おくのほそ道」以後の芭蕉の新たな脱皮と工夫とが書きこまれている、と言っておられるのである。一つの紀行文の執筆年代が、元祿元年と元祿三・四年ということは、どのように受けとればよいのであろうか。ここで「笈の小文」の執筆年代について考えてみたい。そうすれば、散文尊重時代という小宮氏の考えを、もう少しはっきりさせられるのではないかと思うからである。

「笈の小文」から「曠野」への句形の変化が、「笈の小文」を貞享五年執筆と小宮氏がいわれる理由の一つであるが、散文の部分についてはどうであるか。小宮氏は「笈の小文」の一部分として幻住庵記」とを比較して、「『かれ狂句を好むこと久し。終に生涯のはかりごととなす。或時は倦て放擲せん事をおもひ、ある時はすゝむで人にかたむ事をほこり、是非胸中にたゞかふて是が為に身安からず。しばらく身を立むことをねがへどもこれが為にさへられ、暫く学で愚を曉二事をおもへども是が為に破られ、つるに無能無妄にして只此一筋に繋る』の部分三年後の『幻住庵記』の『つら／＼年月の移りこしたき身の科をおもふに、一たびは仕官懸命の地をうらやみ、ある時は仏離祖室のとほそにいらむとせしも、たよりなき風雲の身をせめ花鳥に情を勞して、暫生涯のはかり事とさへなれば、終に無能無才にして此の一筋につながる』の部分と比較して見ると、雙方同じ事を言っているにも拘はらず、『幻住庵記』の表現がいかに謙虚で深沈なものになってあるかが、一目瞭然とするであろう。」とおられる。この事は、「幻住庵記」の成立よりも「笈の小文」の成立の方が、かなり早いことを示しているのは確かである。

ある。自分の過去を語るのに、「幻住庵記」の方がずっと謙虚であり、二つを比較したとき、「笈の小文」の成長した姿を「幻住庵記」に見ることができるのは事実である。しかし、ここでもその差が三年間という事は断言できないのではないだろうか。

「幻住庵記」は推敲に推敲重ねた、芭蕉にとってはひとつの自信作であった。このころ、芭蕉が俳文集を編みたいという希望をもっていたことが、去来のことばで明らかにされている。しかし、「心かなふ物希」だったために、終に編まれることなく終わったようである。そのころに、この「幻住庵記」は「猿蓑」に入れて発表されているのである。そこには芭蕉の自信の程もうがかわれる気がするし、公表することが念頭におかれていたであろうものと、未完成のまま終ったものでは、書く態度に多少の変化もなかったとは、いえないのではなからうかと思うのである。

「笈の小文」の中の「西行の和歌における云々」という有名な一文を、井本氏は「生活が風雅（芸術）の中に埋没した時、その人は始めて真の人間になる。芭蕉はそう主張する。（中略）この考え方については、再三触れて来た。だが元祿四年頃に、この『笈の小文』の文のような形で、芭蕉がはっきりと述べたのは、芭蕉がそのような覚悟をもう一度新たにしたらからであろう。」と述べておられる。そしてその事は、芭蕉が俳風の上で元祿三・四年の頃から、観念的な「重み」を嫌って新しい作風に転じつつあったことを指しているのである。又、井本氏が「笈の小文」元祿三・四年執筆説を強調されるのは、芭蕉の最後の作品であり、また俳諧的紀行文という独自のものをうちたてる事に成功した、「おくのほそ道」との関係重視しておられるからである。「芭蕉が『笈の小文』の中でのべ

た紀行観は、文学としての紀行観であり、それは『笈の小文』の序論として書かれたものであるが、『おくのほそ道』の序論という地位で考えられるものである。」と井本氏はいっておられる。

「笈の小文」は来定稿のままに終っている上に、現在に正確な資料となるものを残していない。その故、執筆年代をはっきりと断定することが困難なのである。芭蕉は「笈の小文」の中に、たくさんものを盛りこもうとした。文学としての紀行観、旅についての意見、芸術論、それらが入り混っていて、まとまりをなくしているようなものである。あれもこれも、いやこれも書いておかねばならぬ、というような態度がかがうような気がする。それが「笈の小文」を未完成にしてしまったのかもしれない。いろいろな要素を集めすぎて、ついに収拾がつかなくなったというような様子が見える。貞享五年という年は、芭蕉にとっては楽な、悪くいえば緊迫感のない年であった。その年と「笈の小文」の全文とは、どう考えても結びつけがたい気がするのである。かといって、井本氏のように元禄三・四年執筆とするのも、まだためらわれるのである。

「笈の小文」の紀行観を、「おくのほそ道」へ続けることは可能であるし、そう考えることによって、「おくのほそ道」が生きてくる事も事実である。しかしながら、「笈の小文」のまとまらなかつた姿は、かなりながい年月を経ていることをおぼしめる。「笈の小文」に関連した俳文は、それぞれにまとまりをみせている。その制作年代は、一応貞享五年頃とされるが、それらの俳文からも、紀行文だけをわけはなれた年代に考えるのは、何か不自然におもえるのである。私は「笈の小文」の執筆年代を、一般的に考えられているように、貞享五年に書きはじめられていたものが、「更科紀行」や「おくのほそ道」の紀行で中断されて、元禄三・四年までかかったものと考えたい。

このようにして「笈の小文」の執筆年代を考えてみると、小宮氏のいわれる(2)のグループ、すなわち、貞享四年からほぼ一年間に、連続してかかれたもの、ということがおかしいのではないかと思われてくるのである。つまり、「笈の小文」は(2)のグループから、制作年代ではおぼしてよいし、又、「野ざらし紀行」と、「おくのほそ道」との線から脇道にそれているという事でも、「鹿島紀行」や「更科紀行」とでは違って扱うべきである、と思うのである。「鹿島紀行」と「更科紀行」の形式の違いについては、(1)で述べたのでここでは略したい。小宮氏が、なぜ「笈の小文」を脇道にそれたものとして考えられたかの理由については既に述べたが、形式的には同じ傾向をたどりながらも、乱れがあり、ふみはずしているという事実こそ、見落せないところではなからうか。

今まで述べたような理由によって、小宮氏がたてられた散文尊重時代をささえている(2)群が、非常に不安定存在であることはわかっていただけると思う。芭蕉の彷彿と自得とを我々に示す徴候として、散文尊重時代というものを立ててみたいと、小宮氏はいわれるのであるが、その決め手として「笈の小文」を使うには、あまりにも未解決のことが多すぎるようである。まして、「笈の小文」を貞享五年秋の成立とした上での事であったので、「笈の小文」の執筆年代を断定できないいまは、他の二つの紀行文の形式の違いを考えあわせても、これら三つの紀行文を、ひとまとまりとした前後に散文尊重時代の始まりを立てることは、無理ではないかと思うのである。

注1「芭蕉、世阿弥、秘伝勘」小宮豊隆著 白日書院
注2「芭蕉とその人生と芸術」井本農一著 講談社